



## 1 はじめに

平成29年3月に、小学校・中学校ともに新学習指導要領が公示され、移行期間は2ヵ月後に迫っています。今回の改訂による学習指導要領解説は、抽象的な表現ではなく、具体的な解釈、活動例、留意事項など、事細かく記載されています。そのためページ数は増加していますが、その分大変分かりやすい内容となっていますので、是非お読みください。

## 2 新学習指導要領「Q&A」

### Q8：新小学校学習指導要領5・6年生外国語の「書くこと」について教えてください。

新小学校学習指導要領解説 外国語活動編、新小学校学習指導要領解説 外国語編及び新中学校学習指導要領解説 外国語編などを熟読（特に「領域ごとの目標」など）し、それぞれの違いを明確に把握する必要があります。

例えば、新小学校学習指導要領解説 外国語編 22～23 ページには、「書くこと」の目標として以下の2つが挙げられています。

「(5)書くこと ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。」

「(5)書くこと イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。」

ポイントは、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」を書くということです。単語を書く練習から始める訳ではありませんし、初めて見たり聞いたりしたことを書く訳でもありません。「音声で十分に慣れ親しんだ」ことに限り、「書き写す」「例文を参考に書く」ことが求められているだけです。中学校の「書くこと」とは大きく異なりますので、留意が必要です。

「音声で十分に慣れ親しんだ」簡単な語句や基本的な表現

書き写す

例文を参考に書く

## Q9：新中学校学習指導要領の「授業は英語で行うことを基本とする」について教えてください。

「授業では All English が義務付けられるのですか？」という質問をよく受けます。新中学校学習指導要領解説 外国語編 82～84 ページを見てみましょう。以下のようにまとめられています。

生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること。

ポイントは、①生徒が授業の中で「英語に触れる機会」を最大限に確保すること、②授業全体を英語を使った「実際のコミュニケーションの場面」とすることをねらいとしている点です。

さらに、ただ英語を使って授業を行えばよいということではなく、教師の使用する英語が生徒にとって効果的なインプットとなるように、「生徒の理解の程度に応じた英語を用いる」教師側の工夫が求められているのです。「そうした趣旨の授業展開であれば、必要に応じて補助的に日本語を用いることも考えられる。」とも記述されています。

指導言語を単に日本語から英語に変えることで済むと短絡的に考えるのではなく、もしこれまで日本語での文法説明や本文の和訳などに偏った授業を行っていたら、そうした授業の在り方自体を見直し、必要な意味内容をいかに英語で伝えることができるかを考えて授業を工夫改善していかなければならないという意味が込められているのです。

授業は英語が基本 → 英語に触れる機会 + 実際のコミュニケーションの場面

### 3

#### 小学校 外国語活動と外国語科の連携の在り方

小学校外国語教育は早期化及び教科化されることとなります。早期化される3・4年生の外国語活動と教科化される5・6年生の外国語科は、どのように連携すればよいのでしょうか。

##### (小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックより抜粋及び一部改)

まず、抽象思考の高まる高学年児童が成就感をもつことができるように、新学習指導要領では、高学年では「慣れ親しみ」ではなく、「習得」が求められる教科となったことを理解する必要があります。

「慣れ親しみ」と「習得」の違いは様々に説明されますが、例えば「慣れ親しみ」は、単元に設定されている様々な活動の中で、その単元で使用するように設定されている語彙や表現を聞いたり話したりしている児童の行動として捉えることができます。一方、その語彙や表現を異なる場面でも使用できる状態を、技能を身に付けている姿、すなわち「習得」をしている状態と考えることができます。

次に、学習意欲や積極性の維持のためには、外国語科においては、教科としての定着を意識するあまり、練習のための活動に偏ることのないように、英語を実際に用いて考えや気持ちを伝え合う言語活動を行うことが重要です。

さらに、音声から文字へつなげるためには、外国語活動は音声を中心に扱い、外国語科においては音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を読んだり書いたりします。音声から文字へとつなげられるように、どのような語句や表現に慣れ親しんだのか、中学年の担当教員と高学年の担当教員で連携を図ることが重要です。

外国語活動と外国語科の連携を図る際には、「慣れ親しみ」と「習得」の点から指導目標を比較・検討し、それぞれどのように指導するかを明確にする必要があります。「聞くこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」において、外国語活動で十分に慣れ親しんでから、外国語科で基礎的な技能を身に付けるようにすることが求められています。